我思う。故に我あり。

特定非営利活動法人ＡＭＤＡ理事長　菅波　茂

二〇〇二年十月二十六日。探検家である関野吉晴医師と話し合う機会があった。人類発祥の地と言われているアフリカへ、中南米から五万キロの距離を十年かけて自転車で旅をした人である。人類の祖先は、アフリカから中南米にたどりついた。その逆を行なった。彼は旅の途中で、いろいろな文化や人々に出会った。「文化はそれぞれに味わいがある。それぞれに趣がある。自分の物差しで文化に優劣をつけるのは愚かしいことだ」と。彼の発言には重みがある。彼ほど多くの文化や人々に触れ合った人はいないからである。彼は「出会い」という変化を大切にしていた。

五万キロを十年かけて旅をする構想と、自分の体を使って自転車で旅をする発想には、大きなギャップがある。このギャップにこそ、「出会い」という甘い蜜が隠されている。本当に自分の人生を楽しんでいる人だと思った。ギャンブルを必要としない人である。ただ気をつけなければいけないことがある。彼が、学生時代に探検部を創設してから二十年間のアマゾン経験のあとに、「五万キロ。十年間の旅」の構想が出たという事実である。彼のロマンに満ちた旅がテレビに放映された。多くの若者が、同じ夢を見るべく彼を訪ねてくる。助言は「一人で行け」である。残念ながら、二十年間の準備期間を理解できる若者は少ない。

「我思う。故に我あり」と言った哲学者がいた。今は亡き手塚治氏の漫画に登場するロボットの鉄腕アトムが、子どもの想像力をかきたてた。想像力は現実化した。本田技研工業が、二本足で歩くロボットの開発に成功した。その成果を踏まえて、介護ロボットへの応用が検討される段階になった。二十一世紀中に、ロボット社会が実現する可能性が高い。アメリカンドリームの体現者であるマイクロソフト社の総帥ビルゲイツ氏は、社員に便利な文明生活のイメージを想像させる。徹底的に。そのイメージ図が、彼の重要な財産になるからである。後は、マイクロソフト社の総力をあげて、イメージの実現にばく進するだけである。膨大な利益を目指して。

一九七一年。ＡＭＤＡの前身である第一次岡山大学医学部クワイ河医学踏査隊をタイ国へ派遣した。三十一年になる。現在は、下記の「人道援助の三原則」に基いて活動をしている。

(1)誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。

(2)この気持ちの前には民族、宗教そして文化などの壁はない。

(3)援助を受ける側にもプライドがある。

この「人道援助の三原則」が産んだのが「ＡＭＤＡ多国籍医師団」である。三十ヶ国の支部が参加した医師団である。「必要とされればどこへでも行く」が可能になった。三十一年前から見れば奇跡である。「ＡＭＤＡはかく思う。故にＡＭＤＡあり」である。

最後に、知識と智慧の違いを述べたい。智慧とは、経験により知識に優先順序を付けたものである。人生は山あり谷ありである。人生における問題解決を可能にするのは、知識でなく智慧である。智慧に不可欠な経験をどうやって身に付けさすのか。古の諺あり。「獅子は我が子を谷に突き落とす」と。あるいは「可愛い子には旅をさせろ」と。どの谷に突き落とすか。どこに旅をさせるか。これは誰の見識が問われているのか。一目瞭然である。